

みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴルの春：人類学スケッチ・ブック

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10502/4579 |

18 死ぬまで乳をやるだけのこと

第十八日め（四月二日）

午前七時の気温はマイナス十五度。きょうはことのほかさむい。群れから子ヒツジを三匹ひろい、これをみせながら三頭の母ヒツジをおびきよせた。もうおなじみの朝の風景。

午前八時、朝のお茶をのんだあと、哺乳タイムの作業にかかる。きのうの夕方、エルデニチメグ姉さんは、ふつうの子ヒツジ三匹をえりわけて、柳条製のかごに入れた。彼女は、乳母に明朝利用するヒツジを選定し、あらかじめその子たちをとりわけたのである。夜のあいだに哺乳してしまわないように、乳母予定のヒツジの子を母からひきはなした。いわば、オンチン（孤児）たちのために、母ヒツジと子ヒツジの仲をさいたのであった。当のオンチンたちもまた、むやみに乳をぬすみ飲みしないようにやはり同一のかごに入れられた。柳条製のかごのなかには、五匹の子ヒツジ。乳母にされるメスの子と、乳母してもらう子と。まさに乳をわけあう乳兄弟である。

このころになると、オンチンたちの養育対策には、一定の方針がさだまっていた。朝はヒツジに、夕はヤギに、という乳母の選択である。すでに、出産したヒツジの個体数は三十をこえ、ヤギは十に達した。適当な乳母がいないとモージは嘆いていたが、ほぼ固定した乳母を利用するようになってきた。朝はヒツジをとらえて乳母とする。そのために、子ヒツジを夜間分離しておく。夕方は放牧からかえって

きたヤギをとらえて乳母とする。子ヤギたちは石垣内にとどめおかれているので、放牧からかえってきたヤギが実子にあらまえに、乳母とするのである。

正午頃、気温はようやく零度にまで上昇。東から二番めの小さなゲルから子ヒツジの鳴き声がかもれ聞こえる。小さなゲルには、「老いた母」というよび名のホクシン・エージがすんでいる。彼女は、この宿営地にすむ住人のなかで、ただ一人タバコをすう人であった。

屋内にいれられていた子ヒツジは、きのう放牧地で出生したもの。羊人ソヨルトはこの出生をみのがした。子ヒツジだけがあとから発見された。ところが、帰営した群れ本隊のなかに、名のりをあげる母ヒツジがない。子をもとめてメイメイなく母がない。けつきよく、どれが母ヒツジかわからなかった。きのうは一日中北風がふきつけていて、たいへんさむかったから、放牧中の確認がおろそかになったのである。そして、さむさのためにその子ヒツジの耳は凍傷になっていた。

耳が凍傷になった子ヒツジは、尾がやや細くて長い。こういうヒツジは、成長してもでっけりした尾にはならない。脂肪のかたまりの尾をもつ、いわゆる脂肪尾ヒツジとは種類がちがう。人びとは、メリーズとよぶ。細毛を意味するミヤル・ノースという語句と、混血を意味するエルリーズという語彙を合成して、メリーズとよんでいる。細毛種とよばれる改良種と在来種との混血である。

改良種の長所は、羊毛の品質にすぐれ、一頭あたりの羊毛生産量が在来種の二倍にもおよぶ点である。経済的に有利なはずの改良種だが、人びとの評判はあまりよくない。

「さむさによわい。乳はたくさん出るくせに、子をちゃんと面倒みない、ろくでもない」

とモージは批判する。少なくともダンゼン一家では好まれていない。子の面倒見のわるさが欠点として指摘される。ところが、ホクシン・エージ老婆の所有するヒツジはすべて、改良種もしくはその雑種であった。メスが改良種でも、種オスにおなじく改良種が選択されていないかぎり、つぎの世代は雑種



改良種のヒツジに介添するホクシン・エージ

となる。雑種となることによって、経済的な有利さはやや減少する。一方、子の面倒見がわるいという不利さは減少するとはみなされない。人びとは、改良種を好まない以上に、その雑種を好まない。

子の面倒見がわるい母ヒツジにすてられた、尾の長い子ヒツジ。これは、まぎれもなくここでは好まれていない種類のヒツジである。ホクシン・エージ老婆のヒツジから生まれたものであった。彼女はタバコをすいながら、あわれな子ヒツジをかたる。

「えーい。暖かくなったら耳がおちるんだよ」

凍傷にかかった耳はかたい。やがてもっとかたくなって脱落し、小さな耳のヒツジになるとかた。「はやいとこ母ヒツジをみつつけてきて、哺乳させなくちゃいけない。乳の出はいいんだから。でもみんな、わたしのヒツジをきらってるだろ。おまえ聞いているだろ」

ヒツジをかたりながら、彼女は自分の人生も語りはじめる……。

彼女は、分家の嫁トヤーの実父の妹である。トヤーからみれば、「アブガ・エージ（父方の母）」つまりおばに相当する。いっぽう彼女は、モーシ母の二歳上の兄の嫁であった。義理の姉であったから、モーシよりも年下なのに「アブガイ」つまり奥様と敬称でよばれる。モーシの兄である彼女の夫は、日本軍にいたという理由で、一九四五年にロシア人によって北方へ拉致された。モーシの先夫がそうであったように。やがて、夫が死んだという消息をきいて、再婚する。すでに実子は幼少時にうしない、二人の養子もまた幼児のときに死んだ。再婚後は、人民公社組織のもとで、もっぱら種オスウシを担当した。雪害にもつともよわいといわれる種オスウシを、あの七七年のゾドさえ、なんとか生きぬかせたことを、彼女はいまも誇りにしている。十年まえに夫が死んでから、一人ぐらしをつづけた。一人ぐらしを気づかっていた分家たち夫婦のすすめで、ここへ移住した。彼女のかつての居住地では、ヒツジがすっかり改良されていた。今日では改良事業がさほど推進されていないため、けつきよくほとんが改良種と在来種との混血になっていく。母にみすてられた、尾の長い子ヒツジは、彼女がよそからきた人間であることをしめすものともなっていた。子どもがいない彼女には、子どもたちからよばれて自然にできた愛称がない。「老いた母」というよび名は、母でなかったがゆえにあたえられたよび名であった。

凍傷耳の子ヒツジが、母ヒツジに対面できたのは午後三時すぎ。日帰り放牧に出た群れのなかから羊人ソヨルトがつれもどしてきた。母ヒツジは、群れのなかでメイメイないて名のりをあげたという。乳房がはってきたのであろう。母はやはり、メルリーズであった。ホクシン・エージの所有畜であった。凍傷耳の子ヒツジは、母ヒツジとともに石垣のなかへひっこして、そこで哺乳。

この凍傷耳の子ヒツジは無事に実母をえて、孤児にならずにすんだ。死もまぬがれた。しかしその後、ホクシン・エージのまわりで多くの子畜たちが死んでいくこととなる。



ホクシン・エージのゲルの中

「どうせ死ぬにきまつてるさ。死ぬよ」

— というのは、翌日もちこまれた子ヤギ。

「もう死んだんだらう。動かないもの」

と、その日のうちに子ヤギは死んだ。彼女のゲルで子ヤギたちが死んだのは偶然にすぎない。たまたま彼女のゲルに死にかけて子畜がもちこまれただけのことである。しかし、偶然はつづく。彼女のゲルには、若い夫婦のゲルとはちがって小さな子どもがいない。老夫婦のゲルともちがって来客がない。それで、瀕死の子畜が彼女のもとにあつまってしまう。結果として、彼女のまわりでよく死ぬだけのことなのである。それでも、ほかの人ならこうはいわない。ほかの人なら、家畜にするには遠いよ、やがて眠るだらう、と婉曲に表現するのに、彼女は死を明言する。瀕死の子をみて、

「死ぬまで乳をやるだけのことさ」

と彼女はいう。

「こいつも死ぬよ。不必要な子ヤギだ。母ヤギには乳もない」

不必要とは、未成熟メスの出産であることを意

味している。実子を認知してはいるのだが、未成熟なために乳がでない。乳がでない母をもつ子は「母なし」とよばれる。こうした母なしには乳母をあてがえばよい。これを「ザギサハ」という。辞書では「寄乳」と訳される。寄乳（ザギサハ）とは、実母にくわえて、さらに別の母から哺乳させてやることを意味している。したがって、いままでみてきたような孤児に対して乳母をあてがうことを意味するものではない。本当に母をうしなつた子に対して、乳母を用意するのではなく、本当の母にくわえて乳母を用意することをさす。母をうしなつてしまふ事件はまれであっても、乳が不足する状態はまれではなからう。こうした乳不足状況を解決するための養育技法の一つが、寄乳（ザギサハ）である。このように、特定の養育技法をさした動詞がちゃんと存在している。

ザギサハという特定の動詞があるにもかかわらず、これまで人びとはモームレフ（お乳をのませる）という動詞をつかってきた。モームレフの語でさまざまな哺乳補助作業を一括して語ってきた。ただホクシン・エージだけが、伝統的な特定のことばをつかって語る。

「寄乳させようにも、きょうのはみんなだめだ。悪天だ。報いのない動物なんて、なんだってんだ。なんにもならないよ」

彼女は、寄乳をこころみた。しかし、彼女の所有するヤギ・ヒツジのなかに、乳母として適当なものがなかった。乳の出のよいものがなかったのである。

「だれが私のために、つかまえてくれるもんかね。かんたんそうなものをつかまえただけさ」

彼女のために、彼女の子ヤギのために、だれも乳母をつかまえてくれない、とホクシン・エージはいう。だれの家畜かという所有権にこだわらずに乳母をさがせば、乳量の多い母畜はいたはずである。しかし、彼女はそれをしなかった。そして、それを依頼することさえしなかった。彼女はただ自分の家畜の範囲内でつかまえやすそうなものをつかまえて、寄乳したのである。その結果、子ヤギはすっかりお

とろえ、やがて致命的な乳不足をきたすことになる。

十人の子を育てたモージ母さんとは対照的に、一人の子ももたなかったホクシン・エージ母さん。容易に子畜育てをあきらめようなところがあつた。それでも、わたしにとつては、モンゴルの伝統的な子畜育てにかんする良き先生であつた。わたしは彼女から多くをまなんだ。彼女は、わたしのためにやさしいことばや平易な表現をえらぶことがなかつたからである。また、古い表現をそのままつかう人だつたからである。

午後四時、年始まわりのために三月二十五日に出発した父が帰る。ラクダにのり、ヤギの皮をひざにかけ、ふところに子ヤギをだいて帰る。子ヤギは、放牧地でひろつたもの。その母ヤギは、不明。帰宅するなり、矢継ぎばやに質問する。

「出産作業はどんなもんだ」

「死んだのはなにか」

「ウマのたてがみ切りには何人きたか」

まるで、わたしの情報収集力を試験しているかのように、父はまずわたしから確認する。ずうっと額にしわをよせながら聞いている。聞きおわると、戸棚から乳製品をとりだし、少々手につかんで戸外にでる。ぶつぶつ口ずさみながら、乳製品を天地にふりまいた。母ヒッジ二頭をうしなつて以来、なんだかおちつかない父は、ときどきそうして大地に祈る。これ以上の災難がないように、祈っているのだと思う。